

# 博物館の再開と被災文化財の救援活動

■震災における文化財の収集・保管，研究施設の役割

—東北歴史博物館・多賀城跡調査研究所—



被災文化財の救援活動 石巻市文化センター

## 1 当日、直後

平成 23 年 3 月 11 日、職員は通常の職務にあたり、本館の展示室等には解説員 8 名、野外の今野家住宅はボランティア 2 名が来館者の対応をしていた。

### (1) 避難・誘導

東北地方太平洋沖地震が発生した 14 時 46 分、館利用者は 6 名であった。本館の総合展示室にいた 4 名（大人男女各 2）は余

震の揺れに注意しながら中央ロビーを経てエントランスホールに誘導した。今野家住宅の 2 名（小学生：女子 2）も余震に配慮しながらエントランスホールに誘導した。ミュージアムショップ・レストランの店員・ボランティア・職員・解説員等もエントランスホールに集合し、余震がおさまるのを待った。

館利用者のうち、大人男性 1 人と女性 2

人は16時頃に自家用車で帰宅した。小学生2人は家が留守ということで、しばらく女性職員とともに部屋に移動して待機し、19時頃に迎えに来た母親とともに帰宅した。来館者のうち最後の1名、大人男性は関東地方からの旅行者であった。すでに東北本線が不通になっていたため、職員が自家用車で仙台駅に送ったが、あいにく仙台駅は閉鎖されており、夜に当館へ戻った。結局、男性は新潟経由での帰路が確保されるまで、1週間、当館に逗留した。

## (2) 当面の対応

### (ア) 被害状況の概要確認

避難誘導が一段落してから、本館各展示室と建物の安全確認ならびに被害概況調査を行った。幸い、特別展は開催していなかったため、展示室は総合展示室・テーマ展示室の有料ゾーンを中心に調査し、展示資料の一部破損は数点、転倒・位置のズレは10数点、照明灯はすべて頭が振れていることなどを確認した。建物は壁面に小さな亀裂がたくさん入った。建物の周りは、浮き



被災状況 本館—フィルム保管庫

沈みしており、沈下は10センチほどの所もあった。また、コンクリートブロックを敷き詰めたところは大きく波打っていた。

多賀城跡調査研究所では、地震の揺れが収まった後、執務室・収蔵庫等の状況を確認し、さらに特別史跡内の点検に向かおうとした。しかし、この時点で、巨大津波が沿岸部に襲来しているとの情報が寄せられ、博物館周辺の道路網も、地元消防団による津波警戒の規制下におかれていた。このため、史跡内の点検は、後日、安全が確保された段階でおこなうこととした。

史跡内の被害状況の確認作業をおこなったのは周辺の停電が解消し、電話回線が回復した3月16日であった。確認作業の結果、史跡内各所に設置した便益施設や石段などに亀裂や段差が生じていることが判明し、このうち断水で使用不能となった公衆トイレ2箇所については使用を禁止し封鎖した。

館前遺跡の東側斜面に地割れが生じたため、ビニールシートで被覆し応急処置を施した。

### (イ) 臨時閉館

展示室や建物の被災を踏まえ、翌日以降の開館について協議した。この時点では史上稀に見る地震・津波があったことは十分に把握しておらず、また、機械類の故障についても正確に把握できていなかったが、判明している状況でも開館はむずかしいと考えた。そこで、とりあえず13日までの2日間、臨時休館することにした。閉館期間は、状況が明らかになるにつれて延長され、3月31日まで、さらには4月下旬までと延びていった。

### (ウ) 職員の安否確認

当日、常勤職員は半数勤務、解説員12人のうち8人が勤務していた。勤務者を含め、職員・解説員の安否を確認したが、11日は3人の安否が未確認であった。13日までに全員の無事が確認された。ボランティアは

数人と連絡がとれず、後に1人、津波の犠牲となり亡くなられたことが判明した。当日は鉄道・道路の被災もあり、職員2人、解説員4人、それに館利用者1人が博物館に宿泊した。

地震発生当日、多賀城跡調査研究所には職員5名、臨時職員3名が出勤し、全員無事であった。当日、登米市出張中の職員1名と、欠勤していた臨時職員3名とはしばらくの間連絡が取れなかったが、16日までに順次全員の無事が確認された。

### (3) 被害の概要

#### (ア) 本館

- |         |   |
|---------|---|
| 建物と外構   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・建物周り浮沈、通路が波打つ。</li> <li>・池側の外壁の剥離。</li> <li>・内外コンクリート壁にヒビ多数。</li> </ul>     |
| 今野家住宅   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・中門の土台がずれ土壁にひび多数。</li> <li>・本屋漆喰壁、土壁一部剥落。</li> <li>・庭の灯籠転倒、氏神祠転倒。</li> </ul> |
| 展示室等    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・埴輪展示ケースにひび。</li> <li>・雑貨屋商品ケースのガラス1枚破損。</li> <li>・照明付属部品の落下。</li> </ul>     |
| 展示資料    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・土器4点、埴輪1点破損。11点転倒。</li> </ul>   |
| こども歴史館  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・転倒あるも破損なし。</li> </ul>   |
| フィルム保管庫 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオテープ等多数落下。</li> </ul>   |
| 収蔵資料    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文土器、古代瓦等10数点破損、箱10数点転倒。</li> <li>・仏像1躯一部破損。</li> </ul>                     |

#### (イ) 浮島収蔵庫

- |        |   |
|--------|---|
| 建物と外構  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・建物周りが浮沈（沈下30～50cm）。</li> <li>・外部アスファルト通路陥没。</li> </ul>  |
| 収蔵棚と資料 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・棚傾斜、棚移動。箱数百点転倒。</li> <li>・縄文土器等の破損200点ほど。</li> <li>・やきもの等数点転倒。</li> <li>・収蔵図書多数落下。</li> </ul> |

#### (ウ) 特別史跡多賀城附寺跡

- |        |   |
|--------|---|
| 政庁正殿   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・基壇表面舗装の亀裂やゆがみの拡大。</li> </ul>                                |
| 南門トイレ  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・棟瓦漆喰の剥落。</li> <li>・浄化槽機能不全。</li> <li>・敷石のズレ</li> </ul>      |
| 東門トイレ  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・壁にヒビ多数。</li> <li>・浄化槽機能不全</li> </ul>                        |
| 作貫地区   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・あづま屋敷石崩壊。</li> <li>・露出展示覆屋柱損傷</li> <li>・階段踏み石のズレ</li> </ul> |
| 大久保地区  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・遊歩道路肩崩壊。</li> <li>・遊歩道に地割れ発生</li> </ul>                     |
| 多賀城廃寺  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・塔階段のズレ。</li> <li>・トイレタンクの破損。</li> </ul>                     |
| 柏木遺跡   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・舗装等にひび多数。</li> <li>・擁壁のズレ発生</li> </ul>                      |
| 館前遺跡   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・東斜面に地割発生。</li> <li>・周囲の湿地が液状化。</li> </ul>                   |
| 南門周辺地区 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・津波で浸水した地区の震災ゴミを搬入仮置場として使用。</li> </ul>                       |
| 測量基準点  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・地震により東に約30cm変動</li> </ul>                                   |



### 震災1カ月後の多賀城南門南側の様子

多賀城南門跡の南方に設置された震災ゴミ仮集積場。

なお、電気は3月15日までと、大きな余震のあった4月7日深夜から9日まで停電した。水道は3月31日までと4月7日から10日まで断水、ガスは4月5日までと4月7日から10日まで使用できなかった。

#### (4) 多賀城市との連携

道路を隔てた南隣りにある、多賀城市立高崎中学校が多賀城市の指定避難所となっている。当館は避難所となっていないが、市からの要請等により、当館駐車場を避難者用の駐車場として開放した。また、近隣住民へのトイレの使用や池水のくみ取り(下水用)についても協力を行った。

多賀城跡調査研究所では、多賀城市の避難所対応職員の要請に応じ、発掘現場等で使用していたポリタンク、ガソリン携行缶、

梱包材などの物資を貸与・供与した。

また、史跡内の被害状況の確認は市文化財課と多賀城跡調査研究所が協力しておこなった。余震が鎮静化した6月には被害状況のデータを整理統合し6月30日付けで、文化庁に毀損届を提出した。

## 2 復旧、開館(4月26日)へ

### (1) 開館

3月13日に当博物館の主務課である教育庁文化財保護課から、図書館・美術館とともに博物館を3月14日から同月末日まで休館とする連絡があった。これにより復旧は4月1日の開館に備えて行うことになった。本格的な被害状況の把握および復旧作業は、電気が使えるようになった3月16日から行った。

16日に本館の廊下に置いてある展示ケースの状態を確認し、固定した。また通路を塞いでいた展示部材を撤去し通路導線を確認した。また、図書資料の復旧を図書収蔵庫・図書情報室で行った。図書収蔵庫の書庫は電動書庫で、各棚に転落防止のストッパーがあるため、9割以上の図書が棚にそのまま収まっていた。図書情報室は開架式で、転落防止措置がなかったこともあり、床面に設置してある書棚は多くの図書が落下した。壁面の棚に収納した図書は前方に移動していたが、奥行きのある棚であったため、落下したものは1割以下であった。

18日は収蔵庫に入り、本館および離れた場所にある浮島収蔵庫で考古・歴史・文書・民俗・美術工芸資料等を一点ずつ確認する詳細被害状況調査を行った。

19日以降は展示室の詳細な確認作業を開始し、機器等の点検日を含めた復旧日程を作成し、4月1日開館をめざして作業を行った。本館施工業者が行った建物等耐性検査において、映像展示室の天井は安全が確認されるまで利用しないことになった。

25日も展示室の復旧作業を継続して行った。同日、4月1日の開館を再考し、現在、東北本線などの交通機関が復旧の見通しがなく、水道も空調も稼働出来ない、などを



### 被災状況 浮島収蔵庫

左の棚と奥の棚が傾いた様子。

考慮し、図書館や美術館といった他の県立社会教育施設と歩調を合わせ、開館を4月下旬に延期することとした。

4月4日になってようやく空調設備不具合の原因が冷温水送水制御盤の故障と判明した。復旧には25日かかるとのことで、4月下旬開館も危ぶまれることがわかった。そこで空調なしで開館した場合の環境調査に着手したが、6日に詳細な検討をしたところ22日までに復旧可能と判明し、この件は解決した。

7日に開館日を同月26日と決定し関係各所に連絡をした。ところが、同日の午後11時32分に宮城県沖を震源とするM7.1の地震（東北地方太平洋沖地震の余震）が発生した。急ぎ、非常配備職員6人が8日午前0時頃から被害状況の応急調査を行った。午前8時30分に職員全員の安否を確認後、展示室・収蔵庫の状況確認を行った。結果、本館の被害はほとんどなく、浮島収蔵庫はスチール棚の傾きが大きくなったことが判明した。同日から電気（9日まで）、水道（10日まで）、ガス（13日まで）が再び使えなくなった。東北本線は6日に復旧したが、再び運転見合わせとなった。

余震は、幸い開館に大きな影響がなく、引き続き開館準備を進め、11日までに総合展示室の照明調整、清掃、展示品と資料名札の調整を終了し、あとは直前の清掃と微調整、業者による機器点検のみとなった。

12日から21日まで、実質7日は浮島収蔵庫の復旧作業を企画部・学芸部・多賀城跡調査研究所の職員全員で行った。うち3日間は建物2階にある収蔵庫内の傾いた棚に配置してあった多賀城跡出土遺物、約3、500箱を1階の旧ロビーに移す作業で、博物館と多賀城跡調査研究所の職員だけでなく、教育庁文化財保護課職員の協力を得て、連日約20人で行う、大移動であった。

22日と開館前日の25日は展示室の全体

調整を行った。解説員もこども歴史館等の持ち場の清掃を分担して実施した。この間の19日に空調復旧、20日に総合展示室の機器調整が終了していた。鉄道は21日に東北本線仙台～一関復旧、25日に東北本線仙台～東京が開通し、いよいよ開館を待つのみとなった。

震災から47日目、4月26日に再開した。しかし映像展示室は天井が未復旧のため、当分の間、閉鎖することにした。同日、今年度新採用解説員の研修を開始した。

## (2) 事業見直し

4月5日に平成23年度当初の事業を見直した。特別展は春・夏・秋の3回行う予定であったが、このうち自主企画で行う春・夏の展示は、借用資料の関係、生活再建を優先すべき県内の情勢等を考慮して、次年度以降に開催を延期する方向で検討することとした。秋の展示は他館との共同企画であったため、関係機関との協議を行って方針を定めることとした。

教育普及は復旧・復興を活気づけるためにも、可能な限り実施する方向で検討することとした。調査研究活動は震災に関連するものを残し、あとは削減とした。資料管理事業は人件費を削減することとした。

秋の特別展は、4月12日に関係機関で協議した結果、今年度の実施は延期する方向で、関係部署と調整することとなった。今後については、秋に再度集まり、次年度以降の開催の有無を話し合うこととした。

今年度に予定していた特別展をすべて延期せざるを得なくなったため、予算をできるだけ掛けないで、一回だけでも特別展を行いたいと考え、新たに、特別展「いつも元気なこどもたち！」を計画した。震災の影響を受けたこどもたち、ひいては社会全体が元気な姿をとりもどしてもらおうきっかけになればとの思いから企画したものであ

る。さまざまな制約から展示品は博物館に寄贈された資料を中心に構成した。幸い、文化庁の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業（ミュージアム活性化事業）支援事業による補助を受けることができた。

多賀城跡調査研究所では、予定していた4事業（発掘調査事業、環境整備事業、多賀城関連遺跡調査事業、遺構調査事業）すべてについて見直しをおこなった。このうち、発掘調査事業、環境整備事業については継続性が求められるとの判断により予定通り実施することにした。しかし、多賀城関連遺跡調査事業、遺構調査事業については事業を休止することにした。

## 3 被災文化財の救援活動

震災によって被災した文化財を救済するため、文化庁の提案で国による「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業」が始まり、財団法人日本博物館協会、独立行政法人国立文化財機構などによって東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会が設置された。これは被災県の教育委員会から支援要請が出された場合にレスキュー活動を行うもので、対象となるのは絵画・彫刻・工芸品・書跡・典籍・古文書・考古資料・歴史資料・有形民俗文化財・動植物の標本などである。

宮城県は3月29日に文化庁へ支援要請を行い、4月上旬に具体的な支援要請リストを提出した。これを受けて仙台市博物館に委員会の現地本部が設置され、4月下旬から本格的な救援活動が行われた。

博物館はこの活動に打合せの段階から加わった。4月から9月11日までに参加した活動は以下のとおりである。

### 東北歴史博物館

石巻文化センター	32日	123人
熊野那智神社	4日	14人
東松島市埋蔵文化財収蔵庫		

	3日	6人
その他7か所	7日	10人
	計	46日 153人

#### 多賀城跡調査研究所

石巻文化センター	4日	7人
----------	----	----

東松島市埋蔵文化財収蔵庫	3日	6人
--------------	----	----

	計	7日 13人
--	---	--------

活動に伴い、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会の依頼を受けて当館で一時的に保管した資料は1,348件に及ぶ。

## 4 課題とその対策

### (1) 震災応急対策マニュアルの見直し

今回の東北地方太平洋沖地震は、約4分という長時間にわたって強い振動が続くという、これまでにない特徴があった。

当館の避難誘導は屋外への避難路の安全

確認後、本館から100mほどの場所にある駐車場へ避難することになっている。しかし、今回の地震は規模が大きく、また揺れが頻発したため、現場の判断で、天井からの落下物の心配がない本館エントランスホール中央部分に集まった。また、多賀城市内においても甚大な被害が発生したことから、今回の地震・津波を想定した避難体制が必要になった。そこで、これまでの震災応急対策マニュアルを検討し、当分の間、以下のように変更することにした。

研修室等では来館者を壁や窓の反対側に頭を向けて机の下にもぐらせ、台や机の脚をしっかりと持たせる。展示室ではその場で身を低くし、頭を腕等で覆い保護する等の防御の姿勢を取らせる。地震が弱くなってきたら、極力中



### 被災文化財の救援活動 浮島収蔵庫

一時保管した資料を害虫・カビから守るための、くん蒸準備。

中央ロビーに出るよう声がけする。

職員は揺れが続く間、来館者等を安心させるよう「もう少しの辛抱です」等の声をかけ続ける。

地震が収まり次第中央ロビーからエントランスホールに誘導し、負傷者の確認等を行う。

避難場所は当分の間、駐車場ではなく、正面玄関前ペープメント1（ピロティ1脇）とする。津波警報が出た場合には、ピロティの階段を使い、3階こども歴史館と繋がる屋上に登る。

## （2）収蔵庫の被災

本館の被害は軽微であったが、浮島収蔵庫は一部の棚が傾斜するなどの被害があった。建物・収蔵庫は昭和49年に完成したもので、改めて収蔵庫棚の構造を見ると、筋

交いが不足していたと思われる。こうした点は復旧工事の設計段階で検証する予定である。

## （3）被災文化財の救援活動

今回の災害は地震による被災に加え、津波による被害が甚大であった。県民にとっても史上稀にみる災害となってしまった。文化財にとっても、津波によって資料が被災した例は文化財保護体制が確立して初めてのことである。

県内で文化財の保存科学担当職員がいるのは東北歴史博物館だけであり、今後も博物館および多賀城跡調査研究所の職員としては、可能な限り被災文化財の救援に取り組んでいく予定である。



### 被災文化財の救援活動 東松島市埋蔵文化財収蔵庫

津波がもたらした汚泥の中から被災した考古資料を探している様子。